

# 読書のすゝめ

立志館ゼミナールから、この夏おすすめの本を紹介いたします。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

## 夏の祈りは

須賀 しのみ(すが しのみ)

八百先生 新潮文庫

悲願であると言われ続けた、「全国高等学校野球選手権埼玉大会優勝」つまり、「夏の甲子園出場」を、県立北園高校野球部が果たすまでの道のりを描いた青春ドラマです。選手「マネージャー」、監督、OB、それぞれの立場や考えがきめ細かく描かれていて、高校野球に関心のある人はもちろん、それほど関心のない人でも、登場人物に共感できるところは、大いにあると思います。格下の相手に負けたキャプテンが立ち戻った最後の夏、二人のエースを擁して戦ったが惜しくも敗れた夏、女子マネージャーの仕事ぶりが光った夏、期待されていない「ハズレ世代」が三年生となり、長年の悲願に立ち向かう夏。先輩から後輩へと受け継がれてきた夢やそれぞれの夏を、思う存分味わってみませんか。

奇しくも、今年の夏の甲子園は、第百回大会という記念すべき大会です。この作品を読んでから観戦すると、格別さもひとしおだと思えますよ。

## ちぐはぐな部品

星 新一(ほし しんいち)

向井先生 角川文庫

みなさんは「ショートショート」というものを知っていますか? 「短編よりもっと短い小説」最近では「短くて不思議な物語」と言われることもあります。この本に収められている全三十篇はショートショート。どれも、短くて、はらばらで、ちぐはぐな、不思議なお話ばかりです。未来の世界でロボットが巻き起こす事件、廃屋に住んでいる落ち武者のお化け、永遠にたどりつけない宝の島、街中に恋の矢を放ちまくるキュービッド、神様を聲明しようとした博士……。

このお話たちが描かれたのは、今より五十年前のこと。「もし、こんなものが発明されたら」「もし、こんな惑星があったら」「もし、こんな未来がやってきたら」……作者の星新一さんは、さまざま「もし」を生み出す達人でした。「昔に書かれた未来の話」なんて、ちょっとわくわくしませんか? みなさんの目で見てください。

## 屈折万歳!

小島 慶子(こじま けいこ)

石本先生 岩波ジュニア新書

人との距離がつかめず、家族との関係もつまづきかす、自分のことを好きに出来ない……とあなたは悩んでいませんか? そんな人にこそ、この一冊はおススメです。学校でも、家でも、就職したテリシ局でも空回りをしては落ち込む日々を送っていた著者の屈折体験をもとに「ここにも居場所がない」「自分のことを好きに出来ない」と悩む十代に向けて、家族、社会、自立についてつづったエッセイです。

目次には、「友情は永遠でない!」や「親だつて他人!」や「全員に愛されなくていい!」などがあります。字面を見たただけとドキッとすることもありませんが、読み進めていくと「なるほど、そういうことか」と気づき、楽な気持ちになつてくるので安心を。もし、あなたがこの一冊を読んだら、ぜひあなたのお父さん、お母さんにもこの本をすすめてあげてください。

## いっぺんさん

朱川 湊人(しゆかわ みなと)

田邊先生 文春文庫

一生にいっぺんだけ願ひ事を叶えてくれる「いっぺんさん」を探して、山に登る主人公とその友人「いっぺんさん」に二人が願ったことは?

みなさんはもし願ひ事が一つだけ叶うとしたら、誰のためにどのような願ひ事をしますか? そんなことを考えるだけでワクワクしてきますね! 友情と懐かしさに満ちあふれた、涙をも誘うノスタリック青春ホラー小説。夏の読書感想文にピッタリのお話です。

## かまいたち

宮部 みゆき(みやべ みゆき)

中本先生 新潮文庫

皆さんはこれまで、何かの事件に遭遇したことはありませんか? もしもこれは事件の現場を目撃したことはありませんか? もしも、あなたが自撃したのが殺人現場で、犯人の顔を覚えていたとしたら、そしてその翌日、犯人があなたの家の向かいに引っ越してきたとしたら……?

これは、江戸の町医者娘おようが人斬り現場に遭遇し、しかもその犯人の男、新吉が向かいに引っ越してきたというお話です。何の力もないおようですが、何とかして新吉を捕まえようと奮闘します。わずかな協力者さえも斬られてゆくなかで、やがておようは決死の策に打って出るのです。侍や刀が出てくる時代小説には馴染みがないという人にもおすすめの一冊です。ホラーではないので安心を!

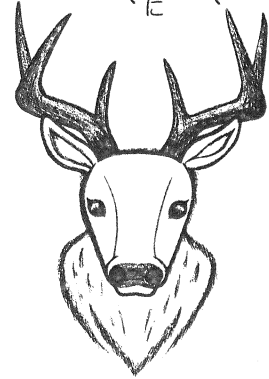
## 鹿男おをによし

万城目 学(まきめ まなぶ)

井上先生 幻冬舎文庫

八月「おれ」は研究をしている大学院の教授から二学期の間だけ奈良にある女子高で理科の教師をするように言われてしまふ。しびしび奈良へと向かうと、なんと鹿が話しかけてきた。その鹿は千八百年前から人間を守り続け、六十年に一度、地下に隠れるなまずを鎮める儀式を十月に行うという。なまずを鎮めなければ日本が滅んでしまうらしい。そして、「おれ」が儀式に使うサンカクと呼ばれるものを京都から奈良へと移動させる「運び番」に選ばれたというのだ。わけがわからないまま、サンカクを手に入れようと奮闘するのだが、思いもかけない事態に陥ってしまふ……。

サンカクと儀式の行方はどうなるのか、その後の展開がどうなるっていくのが気になる一冊です。また、歴史好きにもおすすめの一冊になっているので、ぜひ手に取ってみてくださいね。



## クラスメイツ〈前期・後期〉

森 絵都(もり えと)

久常先生 角川文庫

新生活の始まる四月。この物語の主人公は、北見第二中学校の一年A組二十四人全員。

中学生になり、新しい自分になろうと密かに思つ「千鶴」のエピソードから始まり、次の章からはその千鶴の親友「しほりん」の思いについて……と、クラスメイト一人ひとりの内面がリレー形式で描かれています。新学期早々の友達作り、親友同士に出来たふとしたほころびや、ほのかな恋心など、皆さんにもきっと共感できるお話があるはず。そして、「自分の思っている自分」、人から見た自分は違ふ」ということに気付かされるでしょう。他の章ではいちクラスメイトだった子が、別の章で主人公となり、内面をさらけ出しているのですが、それを読むことでその子のことをもっと好きになっていきます。それは普段の私たちにも言えることではないでしょうか。

このお話は、〈前期〉〈後期〉と二冊に分かれています。物語もそれに合わせ一年の流れに沿って進んでいきます。二十四人という小さなクラスの、個性あふれた生徒たちの成長を、一緒に感じてみてくださいね。

猫丸先輩の空論

倉知 淳(くらち じゅん)

松本先生 講談社文庫

童顔に丸い瞳、見かけによらぬ毒舌。年齢不詳の猫丸先輩が遭遇する出来事の数々が書かれているミステリーです。例えば、毎朝ペランダに一本だけ置かれる「ペットボトル」の謎や、呼んでもない「タフシー」が次々やってくる理由など、日常生活にある些細な謎を彼独特の推理で解き明かしていきます。普段、私たちが不思議と思うに当たり前だと思ひ込んでいても、実は見落としていくことがいかに多いのかと気がかされる短編集です。本書の謎もわかりそうにわからない、しかし彼の推理を読めば「そんな考え方もあるんだ」と納得できるものです。決め付けずに様々な可能性(答え)を考えることの面白さを教えてくれる一冊だと思います。

シロクマ係長の奇跡

鈴森 丹子(すずもり あかね)

新田先生 幻冬舎文庫

仕事がつまみいかず、自分の才能を信じるのができなくなつた捺彦。責任感が強く、何でも一人でがんばらうとして苦しむ曲真。好きな人にながな自分の思いを告げられない友紀美。大人になり、それぞれの人生を歩んでいる元幼稚園たちが人生の壁に当たってくじけそうになったとき、目の前に一匹のシロクマが現れた。不思議と懐かしい温かさを感じさせるシロクマは、それぞれの悩みを聞き、そっと背中を押してくれた。そして、離れ離れになった元幼稚園生たちをもつ一度つないでくれた。勉強、友人関係、クラブ……いろいろな悩みを抱え、自分で自分ばかりこんな苦しい思いをするのだらうと思つたことはありませんか? そんなとき、この本を読んで自分を支えてくれる人が身近なところにいることを、そして、自分を信じることの大切さをもつ一度思い出してほしいと思います。



明日の子供たち

有川 浩(ありかわ ひろ)

田中先生 幻冬舎文庫

慎平は、営業の仕事をしていましたが、テレビのドキュメンタリーを見たことをきっかけに、自分のやりたいことを見つけ、転職することを決意しました。新しい勤務先は児童養護施設。子供たちと仲良くなり、自分を頼りにしてくれることを期待しますが、早速壁にぶつかってしまいます。それは、生活態度も成績も良く、人当たりも良い、いわゆる「問題のない子供」と言われている養子か、なぜか慎平にだけ心を固く閉ざしてしまつていくということです。新しい仕事に一生懸命向き合い、奮闘する慎平に、養子は心を開いてくれるのでしょうか? 長篇ですが、続きが気になってすらすら読めると思います。長い夏休みですが、上手に時間を使って読んでみてくださいね。

フーテンのマハ

原田 マハ(はらだ まは)

高木先生 集英社文庫

君たちが大人になったときに、ぜひしてもらいたいことがある。それが『旅』だ。気ままに思ったままに、住んでいる場所とは違うところに出かけていく。とはいっても、中学生の君たちが旅に出るなんてことは難しい。だから、本の中でちょっとだけ、旅で待ち受けていることを体験してみよう。この本は、美術館で働いていた筆者がさまざまな旅の体験をつづつたエッセイだ。旅先でおいしいものに出会ったり、変なお土産を買ったり……。日常とは違ういろいろなことに会おう。とくにルーブル美術館や、モネの睡蓮、ゴッホなどの話は作者ならではの視点があっておすすめです。この本を読んで、新しい場所や新しいものの、新しい人との出会いを楽しめるようになってほしい。

カヲル

森 絵都(もり えと)

吉田先生 文春文庫

死んだはずの「ぼく」は、中学三年生の小林真という少年に「ホームステイ」をすることになりました。「ホームステイ」とは誰かの体を借りて過ごし、前世紀の記憶を取り戻す修行のこと。いざ小林真として生活してみると人間関係で悩み、最初は周囲の人を冷やかかな目で見てしまいましたが、徐々に人の優しさを感じ、考えが変わってきます。

進路のことや人間関係、「自分ってなんだらう?」という「ぼく」のリアルな悩みにみなさんもきっと共感できるのではないのでしょうか? 人の優しさや愛で世界がカヲルなことに気づかせてくれる一冊です。

孫子の至言

田口 佳史(たぐち よしふみ)

平田先生 光文社知恵の森文庫

「勝兵は先づ勝つて、而る後に戦を求め、敗兵は先づ戦ひて、而る後に勝ちを求む。」という言葉があります。「戦ってから勝つてではなく、勝つてから戦へべき。」つまり、必勝を期するならば、絶対に勝てるころまで準備をして臨まなければならぬ、ということです。皆さんのテストでも同じことが言えますよね。この言葉は、実は今から二千五百年ほど前、中国の春秋戦国時代に孫武という人が書いた兵法書に載っています。元は戦争で勝つための書物ですが、これから君たちの迎える受験という戦いにおいても、また、これから続く人生においても非常に役立つことが数多く書かれています。この本を読んで、受験に、人生に、勝つていきましょう!

日本史の内幕

磯田 道史(いそだ みちふみ)

内海先生 中公新書

「つわさの徳川埋蔵金って本当にあるの?」「徳川家康って実はこんな人だった」「江戸時代の日本人は意外に物知りだった」など、この本には「古文書」を解読して明らかになった、教科書には載っていない歴史の裏側、面白さが書いてあります。テーマごとに書かれているので、目次を見て、自分の興味がわいたところから読んでみてはどうでしょう。

歴史とは決して「用語を暗記するもの」ではありません。まずは興味を持つことから始めませんか? この本で少しでも「歴史」に興味を持ってもらえたらと思います。

東大生が選んだ勉強法

東大家庭教師友の会 P H P 文庫 塩崎先生

皆さんには、それぞれ「自分なりの勉強法」というものがあると思います。その中で、「読んで覚える?」「書いて覚える?」「得意な科目からする?」「苦手な科目からする?」など、色々と迷うこともあるのではないのでしょうか。この本には、あの有名な東京大学に合格した学生が実際に実践している勉強法が、具体的に紹介されています。例の中には、「記憶の仕方」「時間の使い方」「続ける技術」など、その中には、「なるほど!」と思えるものや、「そんなやり方でもないの?」「思うほど!」と感じるものや、「ワロコ」が落ちるものばかり。どうやって勉強したらいいか悩んでいる人にとっても、この本は救世主となってくれるはずです。内容をじっくり読んで、自分に合う勉強法を選び、今日からすすべに始めてみましょう!